追悼　鈴木　みどり教授

# 鈴木先生　本当にありがとうございました

産業社会学部長　國　廣　敏　文

故・鈴木みどり教授の追悼記念号を発行するにあたり，心から哀悼の意を表するとともに，同教授の在りし日のお人柄などを偲び，ご挨拶の言葉を述べさせていただきます。

鈴木みどり先生は，立命館大学へ1994年４月に着任されましたから，現在までに12年半の間，立命館大学教授としてお勤めになったことになります。

それまで先生は，1964年に日本大学芸術学部映画学科をご卒業後，1966年に米国スタンフォード大学大学院を修了され，世界ルーテル連盟のマスメディア研究所研究員，ジャパンタイムズ社記者，フリーランスのジャーナリストを経てこられました。その間の先生のご研究のテーマは，テレビを軸としながら，情報やメディアの役割や意味を，子ども，女性や妻，障害者，若者，視聴者，市民といった，いわゆる「社会的弱者」やマイノリティの立場から問い直すというものだったと思います。1977年には「子どものテレビの会」(「市民のテレビの会＝FCT」→現在のNPO法人「FCT市民のメディア・フォーラム」）という組織を立ち上げ，市民運動の立場からもメディアのあり方を取り上げ，分析し，問題点を指摘し，提言を行なってこられました。その成果は，『FCTテレビ診断分析調査報告書』という形で刊行されてきましたし，そのほかにも，このテーマに関する数多くの著作や翻訳を出版されています。

鈴木みどり先生にとって，立命館大学教授への就任は一つの大きな“転機”であったような気がします。なぜなら，第一に，先生のご業績一覧を拝見しておりますと，初期の映像論や意識論のご研究から，テレビを中心としたマスコミ論へ，さらには，その後，先生のご研究の「代名詞」ともなっていくメディア・リテラシー研究に，先生のご関心とご研究が全面的に展開・開花するのがこの時期のような気がしてならないからです。着任以降に著された主要著作は，『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』(1997年)，『メディア・リテラシーの現在と未来』(2001年)，そして『新版スタディガイド　メディア・リテラシー（入門編)』(2004年）と，いずれもメディア・リテラシーに関するもので，いまやこの分野のスタンダードとなっている書物ばかりです。したがって鈴木先生は，現在では，メディアをクリティカルに読み解き，そのことを通じてコミュニケーションを作り出す力に関する理論と実践の統合をめざす研究（メディア・リテラシー）の日本における“第一人者”と言っても過言ではないでしょう。この分野での問題に関して，日本を代表して国際会議に招かれ，ゲストスピーカーとして発言されたこともしばしばでした。

第二に，学部や研究科にとっても，鈴木先生は，“宝”とも言うべき存在でした。先生が着任された1994年は，学部にとっても一つの“転機”の年でした。1980年代末に，①産業・社会，②都市・生活，③発達・福祉，④人間・文化の「四コース制」を導入した後，94年には，それらに，⑤情報・メディアと⑥スポーツ・表現コースを加えました。われわれは，鈴木先生を，この「情報・メディア」コースの“目玉”としてお迎えしたのです。以来，立命館大学教授としての鈴木みどり先生は，まるで“水を得た魚”のように活き活きと活躍をされ，多くの学部生や大学院生の教育に関わってこられました。

先生の影響を受けて，メディアに進路を見い出すものや大学院に進学するもの，先生を慕って他大学から社会学研究科に進学してきた学生も数多くおり，鈴木ゼミは，本学部における“人気ゼミ”の一つとなりました。しかし人気の理由は，ゼミのテーマだけではなく，先生のお人柄によるところが大であります。

残念ながら私は，忙しさにかまけて，先生とユックリとお話する機会を多くは持ちえませんでしたが，それでも，学内で先生をお見かけしたときには，必ずといっていいほど，学生や院生と一緒に，というより，彼らの輪の中にいて，いつも楽しそうに語らっておられました。

先生の研究室は，ちょうど私の研究室の斜め向かい側で，先生のお部屋からは，いつも学生たちの楽しそうな声がワイワイガヤガヤ聞こえてきました（時々，先生の大きなお声も）。聞くところによりますと，先生の研究室には大きなテーブルがあって，いつも学生や院生がそれを囲んで，大いに語り大いに議論をしていたそうですね。輪になって，みんなの心が繋がっているかのように。

メディア・リテラシーに関する日本における“第一人者”，学部と大学の“看板教授”でありながら，決して偉ぶらないし，権威主義的にならない。教授会や研究科の教学委員会でも，先生はいつも笑顔を絶やさず，人の意見を柔軟に取り入れつつ，しかし，ご自分の意見を主張されるときには，ピシッとおっしゃられる。同僚のある先生が鈴木先生のことを，「竹を割ったような性格」の先生だと言っておりましたが，まさに，そんな先生です。お話をしていて，その場の雰囲気を和ませ，爽やかな気分にさせてくれる先生です，鈴木先生は。

私がご生前の先生にお会いしたのは，お亡くなりになった月の２日でしたね。神奈川県校友会の総会参加後に，横浜市立大学附属病院にお見舞いに行かせていただきました。先生は，凛としてベッドの上に起き上がり，微笑みながら私を迎えてくださいました。先生は，ご自分の指導なさっている院生のこと，学生のことをしきりに心配されていましたね。ベッドの横にはノートパソコンが置いてあり，ご病気の治療に当たられている合間にも，院生の論文審査報告書の作成や学生とメールでやり取りをされているようでした。あの日が先生とお話できる最後の日となるとは……。

誠実で心優しい鈴木先生，学生や院生みんなのリーダー的存在だった鈴木先生，先生と共に仕事をしてきた産業社会学部の同僚や職員，立命館大学で教えを受けた多くの人たち，先生と交流のあった人たちみんなが，そのお人柄と優しさに魅かれてきました。その先生は，2006年７月23日に天に召されていきました。余りにも早すぎる。いまだに信じられません。私たちはいま，かけがえの無い大切な先生を失った悲しみで茫然とし，打ちひしがれております。今でも時折，先生の声が聞

こえてくる気がしてなりません。

先生は，立命館大学への着任時に，広報課のインタビューに応えて，「メディアの発達史を生きてきた感じがする」と語られていました。その意味で先生は，マイノリティの視座から，市民の側に立って，市民とともに，メディアをクリティカルに分析する「メディア・リテラシー」という日本における新しい分野を開拓し，その“歴史”を築いてきたと言えます。先生のそうした“精神”は，多くの同僚や研究者，市民，学生・院生の心に灯りを点し，強く生き続けています。

先生の後任として2007年４月に着任される先生は，カナダに「メディア・リテラシー」を学びに行く際に，鈴木先生の著書『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』をカバンに入れて渡加したそうです。奇遇かもしれませんが，何か強い“因縁”を感じます。

産業社会学部は，2007年度より１学科５専攻となり，新たな飛躍を遂げます。学生や院生に視点を置き，社会の要請に応えるべく，教職員一丸となって奮闘する所存です。

鈴木先生，長い間，本当にありがとうございました。これからも，私たちを，その優しさと大きな愛で包みこんで，末永くお見守りください。

どうぞ，安らかにお眠りください。